

頼もしい戦友を失って

The Passing of a Trusted Comrade

—石本菅生先生を悼む—

In Remembrance of Ishimoto Sugao

中野 照海 NAKANO, Terumi

● 国際基督教大学教育研究所員・大学院教授

ICU Institute for Educational Research and Service

「戦友」ということばには、友人、同僚、共労者などと比べて、少しどぎつい響きがあります。しかし、互いに仕事を進めてきた仲間としては、このことばがふさわしいと思います。石本さんも私も専攻してきた教育学という分野が、もともと戦争と近い関係にあります。教育学には、ストラテジー（戦略、または方略）、タクティクス（戦術）、ロジスティクス（兵站線）などの専門語があり、システム研究も戦争の遂行とともに発展してきたという経緯があります。

石本さんが、西南学院大学から ICU の大学院教育学研究科視聴覚教育専修課程に入学されたのが 1960 年ですから、ちょうど 40 年のおつきあいとなります。最初は、大学院生と教師として、後にインディアナ大学の先輩と後輩として、そして、インディアナでの博士課程を終えられて、ICU の専任講師に就かれた 1972 年からは、教育学科と後に教育学研究科の同僚として、通算 40 年のつきあいというわけです。これとほぼ並行して、私たちの属する日本教育メディア学会（前身は、日本視聴覚教育学会と日本放送教育学会とが合併して日本視聴覚・放送教育学会となり、さらに名称を変更して現在に至る）では、私が役員を務める間、名称はときに変っていましたが、久しく学会事務局長を務められ、学会運営の実質上の責任者でした。学会の合併のときや、名称の変更のときや、

学会誌の学術刊行物としての申請の手続のときなど、二人三脚での学会運営の仕事が 30 年ということになります。

石本さんは 2000 年 11 月 26 日（日）の午後 7 時 25 分に、眠るように 64 歳の生涯を終えられました。26 日の夕方の 6 時頃、ご自宅の居間でうつらうつらとされているうちに息を引き取られました。救急車で近くの青梅総合病院に運ばれ、蘇生を試みていただいたのですが、そのまま逝去されたとうかがっています。信じられないほど、突然のことでした。

日本教育メディア学会の学会誌と、ニュースレターを依頼している印刷所の担当者が、ご自宅にうかがって、印刷代金の清算をされたのが、11 月 24 日（金）の午後だったということです。お亡くなりになる 2 日前にも学会の仕事をされました。印刷所が大学とご自宅との中間にあることで、車での通勤の行き帰りに生原稿や校正原稿などの受渡しをしておられました。専任の事務局員もいない学会の事務を、一手に引き受けておられたのが石本さんでした。驚くほどこまめに仕事を片付けておられました。印刷所に直接出かけるなど、ご自分が体を動かすことによって余分な出費を削られたおかげで、赤字が続いていた貧乏学会が、収支の均衡が保てるようになりました。これは、ひとえに石本事務局長の功績として讃え

るべきだと思います。

石本さんが2001年の3月にICUの定年を迎えられるのを契機として、学会の事務局を卒業生の篠原文陽兄さんや和田正人さんの勤務する東京学芸大学に移転する予定でしたので、移転準備の仕事も多かったことと思います。頻繁な交渉も始まっていました。大学の仕事の上では、来年の4月から非常勤のお仕事は続けて下さることになってはいましたが、それでも少しはゆっくりされることになっておりました。約30年に及んだ仕事から開放されて、好きな機械いじりを楽しもうとされた矢先でしたので、突然のご逝去はとても残念でした。

石本さんが、視聴覚教育を専攻分野として選ばれた理由の一つに、機械いじりが好きであったことが挙げられます。中学生の頃から、ラジオやハイファイ機器の組み立てに興味を持ち、かなりの数のセットを完成されたと聞いています。大学院では、当時の16ミリ映写機、録音機などの修理も手掛けていました。直接に関係があるとは言えないにしても、後にコンピューターに取り組まれたのも、機械好きの性向が大きく与っていたと思います。インディアナ大学での「教授システム工学」を専攻されて、博士論文では、コンピューターの教育利用に関するものでした。この研究は、この分野でも先駆的業績だったといえます。以来、研究の興味を拡散させることなく、コンピューターの教育利用の研究一筋に歩まれました。現在、わが国のこの分野で活躍しているかなりの数の人たちが、石本さんに直接的、間接的に教えを受けています。研究室のコンピューターの設置も、タンディから始まり、PC88、PC98、アップル、IBMと目まぐるしく変わる中で、新しいシステムが入る度に、研究室のみんなが使いやすいように、配線なども自分でされていました。私のような機械音痴にとっては、得難い先生でありました。トラブルが起こると、いつもSOSを出して、教えてもらっていました。便利なソフトウェアもずいぶんと頂きました。しかし、これらを石本さんの意図どおりに使いこなしていたかどうか、自信がありません。この限りでは、不肖の弟子でした。

久しく続いています日本語教育でのCAIの適用なども石本さんの貢献は大きかったと思います。つい最近までも、鈴木庸子さん(ICU)や、来嶋洋美さん(国際交流基金日本語国際センター)などと日本語教育の教材の開発の仕事を続けていました。私立大学情報教育協会の運営委員も長く務められました。

石本さんは機械が好きであったことの延長線上に、車の運転があります。最初に入手された車が、スバル360でした。この小さな車体の車で、当時福岡にお住まいだったご両親をお訪ねになったときの話しも聞きました。最初の福岡行きのとき、沼津の街角でエンジンから煙が出たので、トランクからやおら消火器を取り出して、慌てることなく火を消したという話しには笑いました。用意のよいことで、万事に慎重な方でした。しかし、それにしても、学会の仕事のために、当時の東京教育大学の茗溪会館での会合にスバルに同乗させてもらったとき、小さな車で都心を大きな車の間を縫うような運転には、少々肝を冷やしました。あのサイズの車ですから、大きなトラックの横に並ぶと、トラックのタイヤがこちらの目よりも高いのに驚いたことを今でも覚えています。

石本先生亡き後の空白は、大学の仕事でも、学会の仕事でも、容易に埋めることができません。平均寿命にもまだ間があるというのに、急ぎすぎたという憾みがあります。そういえば、仕事が速い分だけ、少々せっかちなところがあったかなと思ひ返しています。研究室では、わたし専用にセットして下さったコンピューターのシステムが今も動いています。